

[原 著]

スポーツ学部における英語教育の改善に関する一考察

金丸 千雪*

A consideration of reformation of English language teaching in Faculty of Sports Science

Chiyuki KANAMARU*

Abstract

Numerous studies have shown how extensive speaking has a positive effect on language learning. How, then can teachers set up an effective program that provides learners with suitable speaking material? The reformation regarding English communication classes at the Faculty of Sports Science is an urgent problem. The purpose of this study is to provide accounts of my experiences as a teacher, and investigate the present situation of English teaching. Students' perspectives on English are also given. For teachers who wish to encourage learning, one important task becomes how to organize and activate English textbooks so that they are accessible to students.

KEY WORDS : English language, communication, English teaching

はじめに

大学進学率は飽和点に達し、18歳人口は年々減少の一途をたどっている。この社会状況の中で、学生たちが進出していく様々な社会の要請に応えていくことが、大学教育では重要になってきた。個々の教員が、教えたい事柄をかつて自らが学んできた方法で教えているという現状は変らなければならないのである。とりわけ、英語教育においては学生のコミュニケーション能力を培うところに重点が置かれてきている。例えば、2002年に文科省は『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想、2003年には『英語が使える日本人』育成のための行動計画』を作成し発表している。そこでは、我が国の子供たちがグローバル化された時代を生き抜くために、国際的な共通語である英語のコミュニケーション能力を身につけることが必須であるとして、小学校での英会話活動の充実と

支援を図るための施策が提言されている。具体的には「総合学習」などで英会話活動を行っている小学校に対して、外国人教員や中学や高等学校の英語科教員による指導が行えるようにすべきであるとの意見が出されている。社会や経済のグローバル化、異なる文化との共存共栄、そして持続可能な発展に向けた国際協力のために、英語教育をさらに充実させる必要性に我々は迫られている。

これを受けて、各大学では英語教育の担当者たちがその学習内容や水準、教授方法、高等学校との接続について真剣に論議、検討を始めた。本学においても教育の質を向上、発展させるために、(1)習熟度別のクラス編成 (2)1年生で基礎英語を固めるために全学部、同じ教科書を使用 を実施している。この二点を実行するのにあたって教師が手間暇をかけなければならないのは、入学時のプレイスメント・テストの作成と実施後のクラス分けである。一部の学生が

*九州共立大学スポーツ学部

*Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

試験を受けなかったので再度の実施であったり、あるいは指定されたクラスと自分の能力とが適合していないという学生の訴えに対応したりなどという問題が発生する。また、入学時の過密なスケジュールの中での貴重な時間を、英語という単独の教科に割り振るには、学部の専門科目を担当する先生方の理解を得ておく必要がある。多くの教育現場では、こういった面倒を避けて実施していないのが現実であるが、本学では教員のコンセンサスが築かれて相互の連携がうまくとられているために、テスト実施後にさほど時間をおかずにクラス編成が出来上がる。そして、その次の問題は教育内容である。英語の授業を担当する教員たちは自分たち自身で作成した『アスリートと学ぶ基礎英語』（開文社）を、1年次用の教科書として採用している。この教科書のねらいは、今までに曖昧な文法知識しか持っていなかった学生たちに正しい語法を定着させ、彼らの英語の運用能力を向上させることである。さらに、英語の授業で得た知識や技術を学生たちが正しく自分自身の世界に取り込み、自分自身のものの方を変えていくことが期待されている。だが、ここで問題なのは現実の授業において、ほとんど興味を示さない無気力な学生の存在である。そういった学生たちの思考や傾向を無視すると、一方的な英語の授業となり学習効果は望めない。学生たちを本気にさせる方向性をもった授業を展開するためには、実際の授業で直面する様々な問題を解きほぐす必要がある。スポーツ学部の英語教育改善について、最近の英語教育の動向を参考にしながら本論で考察してみたい。

(1) 英語授業の問題点

以下は、筆者のある日の授業記録である。その問題点から考えてみよう。

【使用機器】CDプレーヤー

【教材】English Learning with Athletes
(トップアスリートと学ぶ基礎英語)

【目標】UNIT 3 一般動詞の使い方を習得する。

- ① 先週の授業でBe動詞について学んだので、その復習を導入として、本題となる一般動詞へと移行させる。(10分)
- ② 一般動詞の文法事項を理解した上で、的確な運用ができるように具体例(英文センテンス)を簡潔に説明し、教師のモデル・リーディングを示す。(10分)

- ③ CDで録音されているネイティブ・スピーカーの発音(特にイントネーションや抑揚)に耳を傾けさせ、ポーズを開けてリピートさせる。基本本文の暗誦に導く。(20分)
- ④ 個別に学生を指名して発表をさせる。原則としてテキストを見ないとの指示を出す。(10分)
- ⑤ 再度、CDによって模範を確認する。(10分)
- ⑥ 練習問題を解かせ、その解答例のプリントを配布して自己採点させる。(20分)
時間が許せば、順番で自分が出した答えを言わせて、その採点を共有する。
- ⑦ 次回に行う本文の読解に備えて、その動機づけをした上で予習を課す。(10分)

このレッスンを終えた後の授業計画では、トップアスリートに関するあるトピックの読解が組まれている。スポーツを専攻している学生の興味を尊重し、彼らに知的な刺激を与えられるような教材が注意深く選ばれている。そればかりではなく、文法事項を説明する際の例文についても英語語法辞典¹⁾で確認を取った上で、教師はそれが学生の学力に適するかどうかを判断して学生に提示する。例えば、運動をする(take exercise)に関連する英語表現は、以下のような例文が適切である。

I have put on weight due to lack of exercise.
(私は運動不足で太った)

He warmed up before the race.
(彼はレースの前に準備運動をした)

You don't have to practice so hard just before the game.

(試合の直前にそんなに一生懸命に練習をしなくてよい)

I have joined the sport club, and I am running around in the park.

(運動クラブに入り、公園を走りまわっています)

トピックの読解は、伝統的な訳読式の英語教育法(Grammar-translation method)では行われぬ。通年を通じて文法解説で訳読して進行するこの方法は、今日まで成果をあげてきたし、現在でもそのような教育を全面的に否定することはできない。しかし、オーラル・コミュニケーションへの関心が高まり、「聞く・話すこと」に意識が強く働く今日の英語教育では、訳読式は避けられる。Wilga M. Riversが指摘するよ

うに、訳読式は「文法知識を教え込むことが重視され、自分自身が意図するところを表現しようと、積極的に言語を使用する（書くことですらも）訓練がほとんどなされない」²⁾という問題が含まれている。21世紀型の英語教育を研究し、その実践をはかろうとする教師に与えられた課題は、受信型から発信型の英語教育をどのように展開するのだからである。高等学校学習指導要領においても、「オーラル・コミュニケーション」の目標は次のように記されている。「日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ことが求められる。

となれば、これまで以上に学習者の主体性の有無が重要になる。例えば、ここで記載されている学習内容、つまりネイティブ・スピーカーの音声を聞く行為は、学生側の学習意欲が相当に高くなければ、単にぼんやりと聞き流すだけで終わってしまう。CDから聞こえる英語の音声が元気良く教室に響いているだけで、学生は何か勉強しているような気持ちになるかもしれない。教室内で教師がCDのスイッチを入れるとすぐに、携帯電話をいじったり、隣の学生とおしゃべりを始める学生がいる。その場で教師が注意をすると、聞き耳を立てている何人かの学生の集中力を中断することになる。そのために、リスニング途中での教師の注意はないのが普通である。こうして、リスニングの時間はやる気のない学生にとって、空虚で無意味な時間となる。彼らはリピートをする練習においても、自分の声が自分の耳に入るぐらいの十分な声を出さない。いや、まったくその練習に参加しようとしないう学生も時々見受けられる。何の学習についても言えるが、自分で何とかしてみようという意気込みと自立心がなければ、上達しない。

これを理論的に少し解説してみよう。O' MalleyとChamotは、授業中のプラクティスにおいてself-monitoringを効果的な方法として挙げている。³⁾ 彼らの述べるself-monitoringはself-evaluationと区別されなければならない。evaluationについては、成績評価としてなじみのある仕事であるが、self-evaluationは教師が学生を評価するのではなく、学生自身が自己点検するのである。つまり、授業の一区切りがついた時点で、学んだものが理解できたか、あるいは復習が必要な箇所はどこなのかを知るために、自分で自分のレベルをチェックするというものである。それに対して、self-monitoringの方式は、“students check their

language production”⁴⁾に尽きる。それは、学習が終了した後ではなく、リスニングやリーディングがなされている最中に自分の理解度をチェックする。この教育法を取り入れてあるのが、LL教室での学習である。教師はブースの中のイアホンから、個々の学生のlanguage productionをチェックしているし、また学生側にもチェックされているという意識があるので全員参加型の授業となりえる。特にオーラル・プラクティスでは、音読して自分の発音が意識されなくなったら、自然な発音になったという証拠である。楽に読めるようになったら、スピードは自然と増してくる。要するに、self-monitoringとは意識して声に出してリスニングやリーディングの練習に取り組む方法なのである。それならば、self-monitoringのためにLL教室、あるいはパソコン・ルームを使用すればよいという結論が出てくるのだが、学校の予算に制限がある、あるいは学生数が多いという理由で、ほとんどの大学は毎週の使用を可能とするような恵まれた環境を持っていない。どうしても、学生の向学心、英語習得への熱心さがすべての基本にならざるをえない。そのことを適切に解説しているのが、『英語教育はなぜ間違っているのか』である。この研究書は、日本人英語教育者が小学校英語という課題に対して、真剣に取り組まなければならなくなった2005年に出版された。そこでの核心は、「一般に、言語は誰かに教えてもらうものではない。自分で学び取るものである。学ぶ側に学ぶ意志と継続的な努力がなければ、周りの者がいくら懸命になろうともだめである。それは、子どもの母語学習を観察すればおよそ想像がつく。」⁵⁾である。

問題を少し整理してみよう。本大学で英語学習の障害になっているのは、学習者の主体性の欠如であると言ってよいだろう。中学校や高等学校で英語に自信をなくしたが、心機一転がんばろうという気力を持つ学生が比較的少ないことである。さらに、教養が専門分野と相まってくると、専門科目のエネルギーが一段と増してくるのであるが、その認識度が一般的にまだ充分でない。スポーツ学部も他の学部同様に、専門科目を教養科目に優先させる価値観が払拭されていない。圧倒的に専門科目担当者が多いという学部の教員構成も、その厳しい現実を反映している。大学教育において教養科目と専門科目とが有機的につながって始めて、真の学士力を学生に授けられるのである。とりわけ、学部の教養科目担当者は異文化を認め合える、人間性豊かな人材の養成に力を入れるべきだ。閉塞した現状を打開する有効な手だてを、次章で検討してみる。

(2) 授業設計の基礎

英語教育で行われるディスカッション、プレゼンテーション、ディベートは、自己表現能力として大学ばかりか、国際社会でも要求されている。この自己表現能力を養うには、どのようにして授業を構築すればよいのだろうか。George R. Deauxらによると、教師と学生は互いに「知的刺激を共有する関係」になり、教室は「知識伝達の場ではなく、自己表現の場」⁶⁾とならねばならない。繰り返して述べるが、教室を自己表現の場とするためには、学生の学習意欲を高いレベルで維持していくことが求められる。では、学生の学習意欲を引き出すために教師は何ができるか。Tessa Woodwardは、教授者が学習者のスタイルを知ることの意義を説いている。教える側は母国語によって、学習スタイルについての質問を学生にする。自宅でも教室でもどちらでもよいが、勉強するにはどのようなやる方を好むかという問いを学生に発するのである。漠然とした質問ではなく、学生の好みを引き出すような質問であることが重要である。次のような項目をWoodwardは挙げている。「文法や語彙を暗記する、先生に直してもらい、クイズを解く、難問を解いて間違える、テストをして良い点を取る、簡単な読みものを読む、英語を話してみようとする、英語の音声やスピーチや歌を聞く、英語で書く、難しい勉強はやめて易しく英語に取り組む、本の練習問題をやる、一人で勉強する、二人、あるいは小さなグループで勉強する、クラス全員で一緒に勉強する、いつも宿題を出してもらいそれをやる。」⁷⁾このような質問をして答えを得ることによって、教師は学生の基礎学力（入学時に行うプレイスメント・テストによる情報）ばかりではなく、学生の傾向やレベルといった見過ごせない情報が入る。学生の意欲的な態度あるいは行動を引き起こすためには、教師はメッセージの送り手として聞き手である学生に関する情報を受け取り、それを手だてとしてコミュニケーションを相互通行的に成立させなければならない。

まさにPenny Urの言う“careful and clear presentation and instructions”⁸⁾が実行されるのが理想である。90分の授業設計をするにあたって、授業の質を高める事柄をここで再確認したい。筆者の経験から、教師の事前準備の度合いが多ければ多いほど、クラス全体のやる気が高まる、学生たちの知的好奇心が広がると言いたい。事前準備を大きく二つに分けると、日頃の研究と前日の教材準備がある。はじめに研

究に関して述べる。わが国のこれまでの英語教育について言えば、英文学を専攻した者が英語を教えている場合が圧倒的に多い。英語教育に従事する者は純粋に言語学を専攻した者に限定すべきだという意見には、異議を唱えたい。かつては大学の英文学科は女子学生たちに人気があったのだが、今日では多くの受験生を引きつけるだけの魅力を持たず、かなり多くの大学では英文学科は廃科になったり、あるいは英語コミュニケーション学科へと名称が変えられている。英文学を専門としている教師は、よほど伝統のある大学か英文学で名前を勝ち取っている大学以外ではあまり必要とされていないのが現状である。しかし、「英文学をやることは、文学作品をいろいろな違った方法で解釈し、それらの異なったアプローチがどのように働くかを理解しながら、文学作品を読むことである。これらの新しいアプローチは、新しいテキストの読み方を作り出し、世界を見る目、世界の中の自分の立場を見る目を養うための潜在的な力を持っている。」⁹⁾のであるならば、英文学研究は英語教育に生かされる。英文学には英文テキスト読解が不可欠であり、テキスト読解とは真剣勝負で英語と格闘することに他ならない。英文学を研究する者はテキストを精査し、テキストを真に読み取ろうとする。そうすることによって、研究者はそれらのテキスト、読み手である自分自身、そして他者を理解するのに必要な解釈という問題に直面する。日々の研究に打ち込んでいるという教師の自信が、教室で恐れず堂々と誇りに満ちあふれた口調にさせ、それが学生を説得する大きな力となる。疑いもなく、教師の高い専門性に裏付けられた、明解な授業が学生の知的好奇心を刺激する。

次に、教材準備の事柄に移ろう。例えば、簡単な会話を二人一組のペアでやりとりをするコミュニケーションの場を設定してみる。LucyがMs Greenに自分の友人のTerryを紹介する場面である。Lucyが朝のさわやかなあいさつをして、友人紹介を簡単明瞭にする。「おはようございます。グリーンさん、私の仲の良い友だちを紹介します。こちらがTerryです。」あいさつによって人間関係は円滑になるので、明るく“Good morning, Ms. Green. I'd like you to meet a good friend of mine. This is Terry.”と言う。英語圏では、ほとんどのやりとりで相手の名前を入れることに注意したい。LucyにMs Greenは応答する。「おはようございます。よろしく申し上げます。いつもルーシーからお話はお伺いしていました。」これを英語で言ってみよう。“Good morning, Terry. I

am pleased to meet you. I've heard a lot about you from Lucy.”となる。このようなスキットをクラス全員の前で演じるのは、話すことと聞くことができるようになる第一歩となる。自分の言いたいことを「伝えようとして話す」、相手の話は「聞こうと意識して聞く」ことを学生に体験させるからである。対話文に出てきたLucyやTerryやMs Greenといった架空の名前を使ってeye-contactを保つのだとすると不自然になる。学生たちの実名や愛称を使ってもらうことで、それが実生活での生きた話ことば(spoken English)に変わってくる。ただ間違えてならないのは、学習内容を学習者の能力を超えた範囲まで広げないことである。英語が不得意である学生は会話自体が難しく、戸惑いを感じそこでものおじしてしまう。クラス全員の参加を促すために、スキットを演じる学生以外の全員は、演じられたスキットの評価点を評価シートに記入するように指示する。評価シートには、教師によって具体的にその評価基準が書かれている。このような授業を設計すると、徐々に学生に自信がついてきて、英語学習へ積極的にかかわろうとするようになる。

(3) 英語教育改善に向けて

最後に提案することは、授業改善のための工夫である。コミュニケーションへの積極的態を持続させるには、「教師主導型ではなく、学生が自主的に参加できる活動の場を提供する」¹⁰⁾という教育理論は教育者の誰もが知るところである。ただ、問題は学生が受け身でなくなるために教師が果たす役割である。学生にとって「楽しい授業」とは何かと考えると、「分かる授業」こそ、我々の目標となるはずである。「分かる授業」を構築するに当たって、ここで二つのテクニックを提案する。第1に、授業開始の際、クラス全体に「さあ、学習を始めるよ」という雰囲気や緊張感を行き渡らせるのは大変に重要である。学生たちの注意力を喚起しないままでは、教師がいくら熱意を持って話そうとも、その内容を学生は受け入れないし理解しようとするしない。教師は大学生の知的レベルに合わせようと、いきなり個人を指名してハイレベルな英文の和訳をさせ、予習していないと高圧的になり別の学生を指名するといったパターンは、もはや過去のものである。筆者が大学教育を受けた時代は、「教えない」、つまり学生が自らの責任で学び取るのにまかされていた時代であり、教師が授業の開始とともにいきなり学生に難解なセンテンスを提示しても、学生たち

はそれに応じるだけの余裕と意欲を持っていた。現代において、大学生の自治や自主性といった課題は後であり、先に来るのは学ぶ意欲が減退した学生たちを明るく前向きにする方法なのである。「学生自身に原因がある」という発想から、教師は脱却しなければすべて前には進まない。つまり、教師サイドで学生をその気にさせ、何度も強調すべきところは強調して情報を正しく伝える努力がある。その努力なしで、授業をより充実させていくことはほとんど不可能である。換言すれば、自分たちの身丈に合った英語を使って表現してみたいという関心を持たせ、学習意欲を起こさせることが先決問題である。教師の用を得た簡潔な説明で学生の興味を喚起した後から、理解させる授業は始まると言っても過言ではない。

第2に、自分で選んだことがしたいという学生の気持ちを尊重することである。大原則やテーマの方向性を教師が示し、具体的な課題は自分たちで設定することで学ぶ意欲は引き出されるのではないだろうか。あらかじめ教師によって選定された教材、すなわち模範となるセンテンスをOral Approachで pattern practiceをさせるだけでは、学生の自発的コミュニケーションが妨げられる恐れがある。昭和四〇年代の英語教科教育はOral Approachでの pattern practiceが全盛期であった。このメソッドを頭にたたき込まれている英語教師は、Oral Approachで日本語を使用することに抵抗感を持つ。大学の英語教師であれば、教室内ではなるべく英語を使用したいと誰しも思う。平均してTOEICテストで500点以上を取れる大学生を教える場合、参加型授業を目指して学生ひとりひとりの自覚を促すためには、英文英答で英語を徹底して日本語を話すことを厳禁する方策は有効であろう。しかし、日本語に置き換えると、知識、技能、考え方としてまとめるもとなり、円滑な学習活動を支えることも事実である。

『講座・英語教授法代10巻』において、述べられていることは傾聴に値する。羽鳥は述べる、「(英語教師は)訳とつけないというと、すぐにその反対の極端に走り、英問英答ということを連想する... (しかし) 本当にわからせるには、日本語を手段として使う必要がある。」¹¹⁾

筆者は日本語で十分に説明した後、英語運用をできるようにする基本会話を練習させた。次に、発想の手がかりとなるセンテンスを提示して、グループで学生たちに自由に独自の会話を作ってもらった。学生たちが創作した会話のスキットは、教師によって添削されるので意味の通ったものとなる。これは学生にとっ

て一つの成功体験であり、ここで学習意欲が出てくる。さらに良いことには、学生は知らず知らずの間に単語ばかりか重要な構文を覚えてしまっている。下記の会話は、学生のオリジナル・スキットを教師が修正したものである。

- Ms. Green: I have tried to walk around my neighborhood every morning.
 Hiro: That's a good idea. I would suggest that you have a variety of foods.
 Ms. Green: I realize that balanced diet and moderate exercise are necessary for good health.
 Hiro: Shall we go to the sports gym together?
 Ms. Green: Yes, let's.

円滑な人間関係は築くには、感情移入が求められると言われているが、ここでヒロの言葉使いは丁寧である。彼が述べた、“I would suggest that you have a variety of foods.”という表現に注目しよう。そこで、「推測」を表すwillの使い方を見た上で、would「たぶん……だろう」という表現を考えみたい。

1. He will be tired now.
(彼は今疲れているだろうね)
2. That would be the best solution.
(それがたぶん一番よい解決法だろう)

1. と2. とを比較すると、wouldを使うと、willよりも丁寧な言い方になる。場合によっては、wouldは自信のなさをwillよりも示すことになる。グリーンさんは適度な運動は行っているが、食事のほうはどうだろうかとヒロは心配したのである。ヒロのアドバイスが親切であることは、食品目を多くとるようにという一般的な注意を少し控えめな表現で彼はしていることから分かる。より効果的なコミュニケーションのために、メッセージの送り手は相手の感情や性質を洞察して、どのようにメッセージを送るかについての配慮がある。一方で、受け手はそのメッセージの内容を理解しなければならない。このようにして上記の会話を創作する過程で、学生たちはどのような表現をすればグリーンさんとヒロはお互いの心の状態を共有できるかを考えていく。こういった試みを何度か重ねる内に、学生の授業態度に変化が現れた。今まで英語に対して消極的であった学生が、音読練習で教科書準拠のCDをまねて、ネイティブ・スピーカーの標準的な発音、リズム、イントネーションを練習するようになった。

た。その練習をきっかけとして、文法や語彙の習熟度は上がるのだから、この変化は大きな進歩である。

おわりに

すべての人間、すべての文化は、深くお互いに関連している。この相互依存という事実を再確認すると、異種の間同士、異文化間のコミュニケーションは今後なお一層重要になる。頻繁になった海外旅行、迅速な情報網、過密化した都市といった現代社会において、職場で外国人と接する頻度は増すであろう。特に、アスリートは仲間や競争相手との精神状況を共有するために、活発にコミュニケーションに参画して、自己を冷静にみつめたり相手の行動を誘発することが求められる。相手からの信頼と理解を得るには、衣服、身体の動き、顔の表情、アイ・コンタクトなど言語のみならず、非言語にも細心の注意を払う。ただ、異国の人間とのコミュニケーションには、言語の欠落が相互理解の障害になる。スポーツ学部の学生に何とか英語をマスターして欲しいと願い、本論で教育改善の提案をしてきた。

英語教育の方法論は、さまざまなものが提案されては消えていったが、それは時代の流れのなかでの必然であろう。英語教育の方法論も時代の影響下にあるからだ。同時に方法論は理論で終わるのではなく、何よりも実践によって裏づけられなければならない。実践には教師、学生、環境、目的意識などいろいろな要素が複雑に絡み合う。それで、これが一番の英語教育の方法であるとは言えない。確実に言えるのは、意図した聞き手（メッセージの受け手）の反応がメッセージの送り手の望んだものとなるには、効果的なコミュニケーションが不可欠なのである。日本語表現も我々が思うよりもはるかに複雑である。それで、英語を勉強するまではまだ手がまわらないと考える人もいるかもしれないが、英語に触れることは日本語を再発見することでもある。また、英語表現がある程度自由にできれば、異文化理解、異文化交流の基礎となる相互理解の高まりが確約できる。外国語を学ぶことは、すべての文化の同一性を理解しながら、文化の多元性を認めることではないだろうか。そればかりではない。これから社会人として活躍する若者は、職業に必要な専門用語の英語表現を習得して、その活動範囲と人間の幅を広げることが望まれる。言語への関心を深めれば深めるほど、一層他者を納得させて自己実現への道が開けてくると強調したい。

注

- 1) マイケル・スワン (著) 金子稔, 廣瀬和清, 山田 泰司 (訳) (1990): 『オックスフォード実例現代英語用法辞典』 桐原書店/オックスフォード, 東京, を参照とする.
- 2) Wilga M. Rivers. (1981): *Teaching Foreign-Language Skills*. Second ed. The University of Chicago Press, Chicago, p.31.
- 3) J. Michael O' Mally and Anna Uhl Chamot. (1990): *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge UP., Cambridge, p. 201.
- 4) Ibid., p.202.
- 5) 山田勇一郎 (2005): 『英語教育はなぜ間違えるのか』 ちくま新書, 東京, p.216.
- 6) George R. Deaux, Yuji Suzuki, Minoru Shimozaki. (1994): *Activating College English Introductory Course*. Ikubundo, Tokyo, p.ii.
- 7) Tessa Woodward. (2001): *Planning Lessons and Courses Designing Sequences of Work for The Language Classroom*. Cambridge UP., Cambridge, pp. 37-38.
- 8) Penny Ur. (1991): *A Course in Language Teaching: Practice and Theory*. Cambridge UP., Cambridge, p. 133.
- 9) ロバート・イーグルトン (著) 川口喬一 (訳), (2003): 『英文学とは何か: 新しい知の構築のために』 研究社, 東京, p.42.
- 10) 田中武夫, 田中知聡 (2003): 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 大修館, 東京, この書は, ペアでのスキットで英語授業を展開していく方法を提示することがねらいとなっている.
- 11) 羽鳥博愛 (1970): 『講座・英語教授法第10巻 英語学習の心理』 研究社, 東京, pp. 63-64.